源おじ

国木田独歩

上

都（みやこ）より一人の年若き教師下りきたりて佐伯（さいき）の子弟に語学教うることほとんど一年、秋の中ごろ来たりて夏の中ごろ去りぬ。夏の初め、彼は城下に住むことを厭（いと）いて、半里隔（へだ）てし、桂（かつら）と呼ぶ港の岸に移りつ、ここより校舎に通いたり。かくて海辺（かいへん）にとどまること一月（ひとつき）、一月の間に言葉かわすほどの人識（し）りしは片手にて数うるにも足らず。その重（おも）なる一人は宿の主人（あるじ）なり。ある夕（ゆうべ）、雨降り風起（た）ちて磯（いそ）打つ波音もやや荒きに、独（ひと）りを好みて言葉すくなき教師もさすがにもの淋（さび）しく、二階

なる一室(ひとま)を下りて主人夫婦が足投げだして涼(すず)みいし縁先に来たりぬ。夫婦は燈(ともしび)つけんともせず薄暗き中に団扇(うちわ)もて蚊(か)やりつつ語(かた)れり、教師を見て、珍らしやと坐(ざ)を譲(ゆず)りつ。夕闇(ゆうやみ)の風、軽(か)ろく雨を吹けば一滴二滴、面(おもて)を払うを三人は心地よげに受けてよもやまの話に入りぬ。

その後(のち)教師都に帰りてより幾年(いくとせ)の月日経(た)ち、ある冬の夜、夜更(よふ)けて一時を過ぎしに独(ひと)り小机に向かい手紙認(したた)めぬ。そは故郷(ふるさと)なる旧友の許(もと)へと書き送るなり。そのもの案じがおなる蒼(あお)き色、この夜は頬(ほお)のあたりすこし赤らみておりおりいずこともなくみつむるまなざ

し、霧に包まれしある物を定（さだ）かに視（み）んと願うがごとし。

霧のうちには一人の翁（おきな）立ちたり。

教師は筆おきて読みかえしぬ。読みかえして目を閉（と）じたり。眼（まなこ）、外に閉じ内に開けば現われしはまた翁なり。手紙のうちに曰（いわ）く「宿の主人は事もなげにこの翁が上を語りぬ。げに珍しからぬ人の身の上のみ、かかる翁を求めんには山の蔭（かげ）、水の辺（ほとり）、国々には沢（さわ）なるべし。されどわれいかでこの翁を忘れえんや。余にはこの翁ただ何者をか秘めいて誰（たれ）一人開くこと叶（かな）わぬ箱のごとき思いす。こは余（よ）がいつもの怪しき意（こころ）の作用（はたらき）なるべきか。さもあらばあれ、われこの翁を懐（おも）う時は

遠き笛の音（ね）ききて故郷（ふるさと）恋うる旅人の情（こころ）、動きつ、または想（そう）高き詩の一節読み了（お）わりて限りなき大空を仰（あお）ぐがごとき心地す」と。

　されど教師は翁が上を委（くわ）しく知れるにあらず。宿の主人（あるじ）より聞きえしはそのあらましのみ。主人は何ゆえにこの翁の事をかくも聞きたださるるか、教師が心（こころ）解（げ）しかねたれど問わるるままに語れり。

「この港は佐伯町（さいきまち）にふさわしかるべし。見たまうごとく家という家いくばくありや、人数（ひとかず）は二十にも足らざるべく、淋（さみ）しさはいつも今宵（こよい）のごとし。されど源叔父（げんおじ）が家一軒ただこの磯に立ちしその以前（かみ）の寂しさを想い

たまえ。彼が家の横なる松、今は幅広き道路(みち)のかたわらに立ちて夏は涼しき蔭を旅人に借せど十余年の昔は沖より波寄せておりおりその根方(ねかた)を洗いぬ。城下より来たりて源叔父の舟頼まんものは海に突出(つきいで)し巌(いわ)に腰を掛けしことしばしばなり、今は火薬の力もて危(あや)うき崖も裂かれたれど。

「否(いな)、彼とてもいかで初めより独(ひと)り暮さんや。

「妻は美しかりし。名を百合(ゆり)と呼び、大入島(おおにゅうじま)の生まれなり。人の噂をなかば偽りとみるも、この事のみは信(まこと)なりと源叔父がある夜酒に呑まれて語りしを聞けば、彼の年二十八九のころ、春の夜更(よふ)けて妙見(みょうけん)の燈(ともしび)

も消えし時、ほとほとと戸たたく者あり。源起きいで誰れぞと問うに、島まで渡したまえというは女の声なり。傾（かたぶ）きし月の光にすかし見ればかねて見知りし大入島の百合（ゆり）という小娘にぞありける。

「そのころ渡船（おろし）を業（ぎょう）となすもの多きうちにも、源が名は浦々（うらうら）にまで聞こえし。そは心たしかに侠気（おとこぎ）ある若者なりしがゆえのみならず、べつに深きゆえあり、げに君にも聞かしたきはそのころの源が声にぞありける。人々は彼が櫓（ろ）こぎつつ歌うを聴かんとて撰（えら）びて彼が舟に乗りたり。されど言葉すくなきは今も昔も変わらず。

「島の小女（おとめ）は心ありてかく晩（おそ）くも源が舟頼みしか、そ

は高きより見下ろしたまいし妙見様ならでは知る者なき秘密なるべし。舟とどめて互いに何をか語りしと問えど、酔うても言葉すくなき彼はただ額に深き二条の皺寄せて笑うのみ、その笑いはどことなく悲しげなるぞうたてき。

「源が歌う声冴えまさりつ。かくて若き夫婦の幸しき月日は夢よりも淡く過ぎたり。独子の幸助七歳の時、妻ゆりは二度目の産重くしてついにみまかりぬ。城下の者にて幸助を引取り、ゆくゆくは商人に仕立てやらんといいいでしがありしも、可愛き妻には死別れ、さらに独子と離るるは忍びがたしとて辞しぬ。言葉すく

なき彼はこのごろよりいよいよ言葉すくなくなりつ、笑うことも稀（まれ）に、櫓（ろ）こぐにも酒の勢いならでは歌わず、醍醐（だいご）の入江を夕月の光砕（くだ）きつつ朗（ほが）らかに歌う声さえ哀れをそめたり、こは聞くものの心にや、あらず、妻失いしことは元気よかりし彼が心をなかば砕き去りたり。雨のそぼ降る日など、淋（さみ）しき家に幸助一人をのこしおくは不憫（ふびん）なりとて、客とともに舟に乗せゆけば、人々哀れがりぬ。されば小供（こども）への土産（みやげ）にと城下にて買いし菓子の袋開きてこの孤児（みなしご）に分つ母親もすくなからざりし。父は見知らぬ風にて礼もいわぬが常なり、これも悲しさのあまりなるべしと心にとむる者なし。

「かくて二年(ふたとせ)過ぎぬ。この港の工事なかばなりしころ吾(われ)ら夫婦、島よりここに移りてこの家を建て今の業をはじめぬ。山の端(は)削(けず)りて道路(みち)開かれ、源叔父が家の前には今の車道(くるまみち)でき、朝夕二度に汽船の笛鳴りつ、昔は網だに干さぬ荒磯(あらいそ)はたちまち今の様(さま)と変わりぬ。されど源叔父が渡船(おろし)の業は昔のままなり。浦人島人(うらびとしまびと)乗せて城下に往来(ゆきき)すること、前に変わらず、港開けて車道でき人通り繁(しげ)くなりて昔に比ぶればここも浮世の仲間入りせしを彼はうれしともはた悲しとも思わぬ様なりし。

「かくてまた三年(みとせ)過ぎぬ。幸助十二歳の時、子供らと海に遊び、誤りて溺(おぼ)れしを、見てありし子供ら、畏(おそ)れ

逃げてこの事を人に告げざりき。夕暮になりて幸助の帰りこぬに心づき、驚きて吾らもともに捜せし時はいうまでもなく事遅れて、哀れの骸（かばね）は不思議にも源叔父が舟底に沈みいたり。

「彼はもはやけっしてうたわざりき、親しき人々にすら言葉かわすことを避くるようになりぬ。ものいわず、歌わず、笑わずして年月を送るうちにはいかなる人も世より忘れらるるものとみえたり。源叔父の舟こぐことは昔に変わらねど、浦人らは源叔父の舟に乗りながら源叔父の世にあることを忘れしようになりぬ。かく語る我身すらおりおり源叔父がかの丸き眼をなかば閉

じ櫓担（ろにな）いて帰りくるを見る時、源叔父はまだ生きてあるよなど思うことあり。彼はいかなる人ぞと問いたまいしは君が初めなり。

「さなり、呼びて酒呑（の）ませなばついには歌いもすべし。されどその歌の意解（げ）しがたし。否（いな）、彼はつぶやかず、繰言（くりごと）ならべず、ただおりおり太き嘆息（ためいき）するのみ。あわれとおぼさずや――」

　宿の主人（あるじ）が教師に語りしはこれに過ぎざりし。教師は都に帰りて後も源叔父（げんおじ）がこと忘れず。燈下に坐りて雨の音きく夜（よ）など、思いはしばしばこのあわれなる翁（おきな）が上に飛びぬ。思えらく、源叔父今はいかん、波の

音ききつつ古き春の夜のこと思いて独り炉(ろ)のかたわらに丸き目ふさぎてやあらん、あるいは幸助がことのみ思いつづけてやおらんと。されど教師は知らざりき、かく想いやりし幾年(いくとせ)の後の冬の夜は翁の墓に霙(みぞれ)降(ふ)りつつありしを。

年若き教師の、詩読む心にて記憶のページ翻(ひるが)えしつつある間に、翁が上にはさらに悲しきこと起こりつ、すでにこの世の人ならざりしなり。かくて教師の詩はその最後の一節(せつ)を欠(か)きたり。

中

佐伯(さいき)の子弟が語学の師を桂港(かつらみなと)の波止場に送りし年も暮れて翌年一月の末、ある日源叔父は所用ありて昼前より城下に出でたり。

大空曇りて雪降らんとす。雪はこの地に稀(まれ)なり、その日の寒さ推(お)して知らる。山村水廓(さんそんすいかく)の民(たみ)、河より海より小舟泛(う)かべて城下に用を便ずるが佐伯近在の習慣(ならい)なれば番匠川(ばんじょうがわ)の河岸(かし)にはいつも渡船(おろし)集(つど)いて乗るもの下りるもの、浦人は歌い山人はののしり、いと賑々(にぎにぎ)しけれど今日は淋びしく、河面(かわづら)には漣(さざなみ)たち灰色の雲の影落ちたり。大通(おおどおり)いずれもさび、軒端(のきば)暗く、往来(ゆきき)絶え、

石多き横町の道は氷れり。城山の麓にて撞く鐘雲に響きて、屋根瓦の苔白きこの町の終より終へともの哀しげなる音の漂う様は魚住まぬ湖水の真中に石一個投げ入れたるごとし。

祭の日などには舞台据えらるべき広辻あり、貧しき家の児ら血色なき顔を曝して戯れす、懐手して立てるもあり。ここに来かかりし乞食あり。小供の一人、「紀州紀州」と呼びしが振向きもせで行過ぎんとす。うち見には十五六と思わる、蓬なす頭髪は頸を被い、顔の長きが上に頬肉こけたれば頷の骨尖れり。眼の光濁り瞳動くこと遅くいずこともなくみつむるま

なざし鈍し。纏（まと）いしは袷（あわせ）一枚、裾は短かく襤褸（ぼろ）下がり濡れしままわずかに脛（すね）を隠せり。腋（わき）よりは蟋蟀（きりぎりす）の足めきたる肱（ひじ）現われつ、わななと戦慄（ふる）いつつゆけり。この時またかなたより来かかりしは源叔父なり。二人は辻の真中にて出遇（であ）いぬ。源叔父はその丸き目睜（みは）りて乞食を見たり。

「紀州」と呼びかけし翁の声は低けれども太（ふと）し。

若き乞食はその鈍き目を顔とともにあげて、石なんどを見るように源叔父が眼（まなこ）を見たり。二人はしばし目と目見あわして立ちぬ。

源叔父は袂（たもと）をさぐりて竹の皮包取りだし握飯一つ

撮(つま)みて紀州の前に突きだせば、乞食は懐(ふところ)より椀(わん)をだしてこれを受けぬ。与えしものも言葉なく受けしものも言葉なく、互いに嬉(う)れしとも憐れとも思わぬようなり、紀州はそのまま行き過ぎて後振向きもせず、源叔父はその後影(うしろかげ)角(かど)をめぐりて見えずなるまで目送(みおく)りつ、大空仰げば降るともなしに降りくるは雪の二片三片(ふたひらみひら)なり、今一度乞食のゆきし方(かた)を見て太き嘆息(ためいき)せり。小供らは笑を忍びて肱(ひじ)つつきあえど翁は知らず。

　源叔父家に帰りしは夕暮なりし。彼が家の窓は道に向かえど開かれしことなく、さなきだに闇(くら)きを燈つけず、炉(ろ)の前に坐り指太き両手を顔に当て、首を垂れて

嘆息つきたり。炉には枯枝一掴(つか)みくべあり。細き枝に蠟燭(ろうそく)の焔(ほのお)ほどの火燃え移りてかわるがわる消えつ燃えつす。燃ゆる時は一間(ひとま)のうちしばらく明(あか)し。翁の影太く壁に映りて動き、煤(すす)けし壁に浮かびいずるは錦絵(にしきえ)なり。幸助五六歳のころ妻の百合が里帰りして貰いきしその時粘(は)りつけしまま十年(ととせ)余の月日経(た)ち今は薄墨(うすずみ)塗りしようなり、今宵(こよい)は風なく波音聞こえず。家を繞(めぐ)りてさらさらと私語(ささや)くごとき物音を翁は耳そばだてて聴きぬ。こは霙(みぞれ)の音なり。源叔父はしばしこのさびしき音(ね)を聞入りしが、太息(ためいき)して家内(やうち)を見まわしぬ。

豆洋燈(らんぷ)つけて戸外(そと)に出(いず)れば寒さ骨に沁(し)むばかり、冬

の夜寒むに櫓こぐをつらしとも思わぬ身ながら粟(あわ)だつを覚えき。山黒く海暗し。火影(ほかげ)及ぶかぎりは雪片(せっぺん)きらめきて降(お)つるが見ゆ。地は堅く氷れり。この時若き男二人もの語りつつ城下の方(かた)より来しが、燈持ちて門(かど)に立てる翁(おきな)を見て、源叔父よ今宵の寒さはいかにという。翁は、さなりとのみ答えて目は城下の方に向かえり。

やや行き過ぎて若者の一人、いつもながら源叔父の今宵の様はいかに、若き女あの顔を見なばそのまま気絶やせんと囁(ささや)けば相手は、明朝(あすあさ)あの松が枝に翁の足のさがれるを見出(みいだ)さんもしれずという、二人は身の毛のよだつを覚えて振向けば翁が門にはもはや燈火(ともしび)見え

ざりき。
夜は更(ふ)けたり。雪は霙と変わり霙は雪となり降りつ止みつす。灘山(なだやま)の端(は)を月はなれて雲の海に光を包めば、古城市はさながら乾ける墓原(はかはら)のごとし。山々の麓(ふもと)には村あり、村々の奥には墓あり、墓はこの時覚(さ)め、人はこの時眠り、夢の世界にて故人相(あい)まみえ泣きつ笑いつす。影のごとき人今しも広辻を横ぎりて小橋の上をゆけり。橋の袂(たもと)に眠りし犬頭(くび)をあげてその後影を見たれど吠(ほ)えず。あわれこの人墓よりや脱け出(い)でし。誰(たれ)に遇い誰(た)れと語らんとてかくはさまよう。彼は紀州なり。

源叔父の独子（ひとりご）幸助海に溺（おぼ）れて失（う）せし同じ年の秋、一人の女乞食日向（ひゅうが）の方（かた）より迷いきて佐伯の町に足をとどめぬ。伴（ともな）いしは八歳（やっつ）ばかりの男子（おのこ）なり。母はこの子を連れて家々の門に立てば、貰い物多く、ここの人の慈悲（めぐみ）深きは他国にて見ざりしほどなれば、子のために行末よしやと思いはかりけん、次の年の春、母は子を残していずれにか影を隠したり。太宰府（だざいふ）訪（もう）でし人帰りきての話に、かの女乞食に肖（に）たるが襤褸（ぼろ）着し、力士（すもうとり）に伴いて鳥居のわきに袖乞（そでご）いするを見しという。人々皆な思いあたる節なりといえり。町の者母の無情（つれなき）を憎み残されし子をいや増してあわれがりぬ。かくて母の

計（はかりごと）あたりしとみえし。あらず、村々には寺あれど人々の慈悲（めぐみ）には限あり。不憫（ふびん）なりとは語りあえど、まじめに引取りて末永く育てんというものなく、時には庭先の掃除など命じ人らしく扱うものありしかど、永くは続かず。初めは童（わらべ）母を慕いて泣きぬ、人人物与えて慰めたり。童は母を思わずなりぬ、人人の慈悲（じひ）は童をして母を忘れしめたるのみ。物忘れする子なりともいい、白痴なりともいい、不潔なりともいい、盗（ぬすみ）すともいう、口実はさまざまなれどこの童を乞食の境（さかい）に落としつくし人情の世界のそとに葬りし結果はひとつなりき。

戯(たわむ)れにいろは教うればいろはを覚え、戯れに読本(とくほん)教うればその一節二節を暗誦し、小供らの歌聞きてまた歌い、笑い語り戯れて、世の常の子と変わらざりき。げに変わらずみえたり。生国を紀州(きしゅう)なりと童のいうがままに「紀州」と呼びなされて、はては佐伯町附属の品物のように取扱われつ、街(まち)に遊ぶ子はこの童とともに育ちぬ。かくて彼が心は人々の知らぬ間に亡び、人々は彼と朝日照り炊煙(すいえん)棚引(たなび)き親子あり夫婦あり兄弟(きょうだい)あり朋友(ほうゆう)あり涙ある世界に同居せりと思える間(ま)、彼はいつしか無人(むにん)の島にその淋しき巣を移しここにその心を葬りたり。

彼に物与えても礼言わずなりぬ。笑わずなりぬ。彼の怒(いか)りしを見んは難(かた)く彼の泣くを見んはたやすからず、彼は恨みも喜びもせず。ただ動き、ただ歩み、ただ食らう。食らう時かたわらよりうまきやと問えばアクセントなき言葉にてうましと答うその声は地の底にて響くがごとし。戯れに棒振りあげて彼の頭上に翳(かざ)せば、笑うごとき面持(おももち)してゆるやかに歩みを運ぶ様(さま)は主人に叱られし犬の尾振りつつ逃ぐるに似て異なり、彼はけっして媚(こび)を人にささげず。世の常の乞食見て憐れと思う心もて彼を憐れというは至らず。浮世の波に漂うて溺(おぼ)るる人を憐れとみる眼には彼を見出さんこと難(かた)か

るべし、彼は波の底を這(は)うものなれば。

紀州が小橋をかなたに渡りてより間もなく広辻に来かかりてあたりを見廻すものあり。手には小さき舷燈(げんとう)提(さ)げたり。舷燈の光射(さ)す口をかなたこなたと転(めぐ)らすごとに、薄く積みし雪の上を末広がりし火影走りて雪は美しく閃(きら)めき、辻を囲める家々の暗き軒下を丸き火影(ほかげ)飛びぬ。この時本町(ほんまち)の方(かた)より突如(とつじょ)と現われしは巡査なり。ずかずかと歩み寄りて何者ぞと声かけ、燈(ともしび)をかかげてこなたの顔を照らしぬ。丸き目、深き皺(しわ)、太き鼻、逞(たく)ましき舟子(ふなこ)なり。

「源叔父ならずや」、巡査は呆(あき)れし様(さま)なり。

「さなり」、嗄(しわが)れし声にて答う。
「夜更(ふ)けて何者をか捜す」
「紀州を見たまわざりしか」
「紀州に何の用ありてか」
「今夜(こよい)はあまりに寒ければ家に伴わんと思いはべり」
「されど彼の寝床は犬も知らざるべし、みずから風ひかぬがよし」
情(なさけ)ある巡査は行きさりぬ。
源叔父は嘆息(ためいき)つきつつ小橋の上まで来しが、火影落ちしところに足跡あり。今踏みしようなり。紀州ならで誰かこの雪を跣足(すあし)のまま歩まんや。翁(おきな)は小走りに

足跡向きし方（かた）へと馳（は）せぬ。

下

源叔父が紀州をその家に引取りたりということ知れわたり、伝えききし人初めは真（まこと）とせず次に呆れ終（はて）は笑わぬものなかりき。この二人が差向いにて夕餉（ゆうげ）につく様（さま）こそ見たけれなど滑稽芝居見まほしき心にて嘲（あざけ）る者もありき。近ごろはあるかなきかに思われし源叔父またもや人の噂（うわさ）にのぼるようになりつ。

雪の夜より七日（なのか）余り経ちぬ。夕日影あざやかに照り

四国地遠く波の上に浮かびて見ゆ。鶴見崎のあたり真帆片帆（まほかたほ）白し。川口の洲（す）には千鳥飛べり。源叔父は五人の客乗せて纜（ともづな）解かんとす、三人の若者駈けきたりて乗りこめば舟には人満ちたり。島にかえる娘二人は姉妹（はらから）らしく、頭に手拭（てぬぐい）かぶり手に小さき包み持ちぬ。残り五人は浦人なり、後れて乗りこみし若者二人のほかの三人（みたり）は老（としより）夫婦と連（つれ）の小児（こども）なり。人々は町のことのみ語りあえり。芝居のことを若者の一人語りいでし時、このたびのは衣裳（いしょう）も格別に美しき由（よし）島にはいまだ見物せしものすくなけれど噂のみはいと高しと姉なる娘いう。否（いな）さまでならず、ただ去年のものにはすこし

く優（まさ）れりとうち消すようにいうは老婦（おうな）なり。俳優（やくしゃ）のうちに久米五郎（くめごろう）とて稀（まれ）なる美男まじれりちょう噂島の娘らが間に高しとききぬ、いかにと若者姉妹（はらから）に向かっていえば二人は顔赤らめ、老婦（おうな）は大声に笑いぬ。源叔父は櫓（ろ）こぎつつ眼（まなこ）を遠き方（かた）にのみ注（そそ）ぎて、ここにも浮世の笑声高きを空耳（そらみみ）に聞き、一言も雑（まじ）えず。

「紀州を家に伴えりと聞きぬ、信（まこと）にや」若者の一人、何をか思い出（いで）て問う。

「さなり」翁は見向きもせで答えぬ。

「乞食の子を家に入れしは何ゆえぞ解（げ）しがたしと怪しむものすくなからず、独りはあまりに淋しければにや」

「さなり」
「紀州ならずとも、ともに住むほどの子島にも浦にも求めんにはかならずあるべきに」
「げにしかり」と老婦（おうな）口を入れて源叔父の顔を見上げぬ。源叔父はもの案じ顔にてしばし答えず。西の山懐（ふところ）より真直に立ちのぼる煙の末の夕日に輝きて真青（まさお）なるをみつめしようなり。
「紀州は親も兄弟も家もなき童（わらべ）なり、我は妻も子もなき翁（おきな）なり。我彼の父とならば、彼我の子となりなん、ともに幸いならずや」独語（ひとりごと）のようにいうを人々心のうちにて驚きぬ、この翁がかく滑らかに語りいでしを

今まで聞きしことなければ。

「げに月日経つことの早さよ、源叔父。ゆり殿が赤児抱（だ）きて磯辺に立てるを視（み）しは、われには昨日（きのう）のようなる心地す」老婦（おうな）は嘆息つきて、

「幸助殿今無事ならば何歳（いくつ）ぞ」と問う。

「紀州よりは二ツ三ツ上なるべし」さりげなく答えぬ。

「紀州の歳（とし）ほど推（すい）しがたきはあらず、垢（あか）にて歳も埋（うも）れはてしと覚（おぼ）ゆ、十にやはた十八にや」

人々の笑う声しばし止まざりき。

「われもよくは知らず、十六七とかいえり。生（うみ）の母ならで定（さだか）に知るものあらんや、哀れとおぼさずや」翁は

老（としより）夫婦が連れし七歳（ななつ）ばかりの孫とも思わるる児（こ）を見かえりつついえり。その声さえ震えるに、人々気の毒がりて笑うことを止めつ。

「げに親子の情二人が間に発（おこ）らば源叔父が行末（いくすえ）楽しかるべし。紀州とても人の子なり、源叔父の帰り遅しと門（かど）に待つようなりなば涙流すものは源叔父のみかは」夫（つま）なる老人（おきな）の取繕（とりつくろ）いげにいうも真意なきにあらず。

「さなり、げにその時はうれしかるべし」と答（いら）えし源叔父が言葉には喜び充（み）ちたり。

「紀州連れてこのたびの芝居見る心はなきか」かくいいし若者は源叔父嘲（あざけ）らんとにはあらで、島の娘の笑

い顔見たきなり。姉妹(はらから)は源叔父に気兼(きが)ねして微笑(ほほえみ)しのみ。老婦(おうな)は舷(ふなばた)たたき、そはきわめておもしろからんと笑いぬ。

「阿波十郎兵衛(あわのじゅうろべえ)など見せて我子泣かすも益(えき)なからん」

源叔父は真顔にていう。

「我子とは誰(た)ぞ」老婦(おうな)は素知らぬ顔にて問いつ、

「幸助殿はかしこにて溺(おぼ)れしと聞きしに」振り向いて妙見(みょうけん)の山影黒きあたりを指(さ)しぬ、人々皆かなたを見たり。

「我子とは紀州のことなり」源叔父はしばしこぐ手を止めて彦岳(ひこだけ)の方(かた)を見やり、顔赤らめていい放ちぬ。怒

りとも悲しみとも恥とともはた喜びともいいわけがたき情胸（こころむね）を衝（つ）きつ。足を舷端（ふなばた）にかけ櫓（ろ）に力加えしとみるや、声高らかに歌いいでぬ。

海も山も絶えて久しくこの声を聞かざりき。うたう翁も久しくこの声を聞かざりき。夕凪（ゆうなぎ）の海面（うみづら）をわたりてこの声の脈ゆるやかに波紋を描きつつ消えゆくとぞみえし。波紋は渚（なぎさ）を打てり。山彦（やまびこ）はかすかに応（こた）えせり。翁は久しくこの応えをきかざりき。三十年前の我、長き眠りより醒（さ）めて山のかなたより今の我を呼ぶならずや。

老（としより）夫婦は声も節も昔のごとしと賛（ほ）め、年若き四人

は噂に違（たが）わざりけりと聴きほれぬ。源叔父は七人の客わが舟にあるを忘れはてたり。

娘二人を島に揚げし後は若者ら寒しとて毛布（けっと）被（かぶ）り足を縮めて臥（ふ）しぬ。老夫婦（としより）は孫に菓子与えなどし、家の事どもひそひそと語りあえり。浦に着きしころは日落ちて夕煙村を罩（こ）め浦を包みつ。帰舟（かえり）は客なかりき。醍醐（だいご）の入江の口を出（いず）る時彦岳嵐（ひこだけあらし）身（み）に滲（し）み、顧（かえり）みれば大白（たいはく）の光漣（さざなみ）に砕（くだ）け、こなたには大入島（おおにゅうじま）の火影早（はや）きらめきそめぬ。静かに櫓こぐ翁の影黒く水に映れり。舳（へさき）軽く浮かべば舟底たたく水音、あわれ何をか囁（ささや）く。人の眠催（もよお）す様（さま）なるこの水音を源叔父は聞くともなく

聞きてさまざまの楽しきことのみ思いつづけ、悲しきこと、気がかりのこと、胸に浮かぶ時は櫓握る手に力入れて頭振りたり。物を追いやるようなり。

家には待つものあり、彼は炉（ろ）の前に坐りて居眠（いねむ）りてやおらん、乞食せし時に比べて我家のうちの楽しさ煖（あたた）かさに心溶（と）け、思うこともなく燈火（ともしび）うち見やりてやおらん、わが帰るを待たで夕餉（ゆうげ）おえしか、櫓こぐ術（すべ）教うべしといいし時、うれしげにうなずきぬ、言葉すくなく絶えずもの思わしげなるはこれまでの慣（なら）いなるべし、月日経たば肉づきて頬赤らむ時もあらん、されどされど。源叔父は頭（かしら）を振りぬ。否々（いないな）彼も人の子な

り、我子なり、吾に習いて巧みにうたい出る彼が声こそ聞かまほしけれ、少女（おとめ）一人乗せて月夜に舟こぐこともあらば彼も人の子なりその少女ふたたび見たき情（こころ）起こさでやむべき、われにその情（こころ）見（み）ぬく眼ありかならずよそには見じ。

　波止場に入りし時、翁は夢みるごときまなざしして問屋（といや）の燈火（ともしび）、影長く水にゆらぐを見たり。舟繋（つな）ぎおわれば臥席（ござ）巻きて腋（わき）に抱き櫓を肩にして岸に上（のぼ）りぬ。日暮れて間もなきに問屋三軒皆な戸ざして人影絶え人声なし。源叔父は眼閉じて歩み我家の前に来たりし時、丸き眼睜（みは）りてあたりを見廻わしぬ。

「我子よ今帰りしぞ」と呼び櫓置くべきところに櫓置きて内に入りぬ。家内暗し。

「こはいかに、わが子よ今帰りぬ、早く燈点けずや」

寂として応えなし。

「紀州紀州」竈馬のふつづかに啣くあるのみ。

翁は狼狽てて懐中よりまっち取りだし、一摺りすれば一間のうちにわかに明くなりつ、人らしきもの見えず、しばししてまた暗し。陰森の気床下より起こりて翁が懐に入りぬ。手早く豆洋燈に火を移しあたりを見廻わすまなざし鈍く、耳そばだてて「我子よ」と呼びし声嗄れて呼吸も迫りぬと覚し。

炉には灰白く冷え夕餉たべしあとだになし。家内捜すまでもなく、ただ一間のうちを翁はゆるやかに見廻わしぬ。煤けし壁の四隅は光届きかねつ心ありて見れば、人あるに似たり。源叔父は顔を両手に埋め深き嘆息せり。この時もしやと思うこと胸を衝きしに、つと起てば大粒の涙流れて頬をつたうを拭わんとはせず、柱に掛けし舷燈に火を移していそがわしく家を出で、城下の方指して走りぬ。

　蟹田なる鍛冶の夜業の火花闇に散る前を行過ぎんとして立ちどまり、日暮のころ紀州この前を通らざりしかと問えば、気つかざりしと槌持てる若者の一人答え

て訝(いぶか)しげなる顔す。こは夜業を妨げぬと笑面(えがお)作りつ、また急ぎゆけり。右は畑(はた)、左は堤(つつみ)の上を一列に老松並ぶ真直の道をなかば来たりし時、行先をゆくものあり。急ぎて燈火(ともしび)さし向くるに後姿紀州にまぎれなし。

彼は両手を懐にし、身を前に屈めて歩めり。

「紀州ならずや」呼びかけてその肩に手を掛けつ、「独りいずこに行かんとはする」怒り、はた喜び、はた悲しみ、はた限りなき失望をただこの一言に包みしようなり。紀州は源叔父が顔見て驚きし様もなく、道ゆく人を門に立ちて心なく見やるごとき様にてうち守りぬ。翁は呆(あき)れてしばし言葉なし。

「寒からずや、早く帰れ我子」いいつつ紀州の手取りて連れ帰りぬ。みちみち源叔父は、わが帰りの遅かりしゆえ淋しさに堪えざりしか、夕餉（ゆうげ）は戸棚に調（ととの）えおきしものをなどいいいい行けり。紀州は一言もいわず、生憎（あやにく）に嘆息もらすは翁なり。

　家に帰るや、炉に火を盛に燃（た）きてそのわきに紀州を坐らせ、戸棚より膳（ぜん）取り出だして自身（おのれ）は食らわず紀州にのみたべさす。紀州は翁のいうがままに翁のものまで食いつくしぬ。その間源叔父はおりおり紀州の顔見ては眼閉じ嘆息せり。たべおわりなば火にあたれといいて、うまかりしかと問う紀州は眠気なる眼（まなこ）にて翁

が顔を見てかすかにうなずきしのみ。源叔父はこの様（さま）見るや、眠くば寝よと優（やさ）しくいい、みずから床敷きて布団（ふとん）かけてやりなどす。紀州の寝（いね）し後、翁は一人炉の前に坐り、眼を閉じて動かず。炉の火燃えつきんとすれども柴くべず、五十年の永き年月を潮風にのみ晒（さら）せし顔には赤き焔の影おぼつかなく漂（ただよ）えり。頬を連（つた）いてきらめくものは涙なるかも。屋根を渡る風の音す、門（かど）に立てる松の梢（こずえ）を嘯（うそぶ）きて過ぎぬ。

　翌朝（つぎのあさ）早く起きいでて源叔父は紀州に朝飯たべさせ自分（おのれ）は頭重く口渇（かわ）きて堪えがたしと水のみ飲みて何も食わざりき。しばししてこの熱を見よと紀州の手取り

て我額（ひたい）に触れしめ、すこし風邪（かぜ）ひきしようなりと、ついに床のべてうち臥（ふ）しぬ。源叔父の疾（や）みて臥（ふ）するは稀なることなり。

「明日（あす）は癒（い）えん、ここに来たれ、物語して聞かすべし」

しいてうちえみ、紀州を枕辺（まくらべ）に坐らせて、といきつくづくいろいろの物語して聞かしぬ。そなたは鱶（ふか）ちょう恐ろしき魚見しことなからんなど七ツ八ツの児に語るがごとし。ややありて。

「母親恋しくは思わずや」紀州の顔見つつ問いぬ。この問を紀州の解（げ）しかねしようなれば。

「永く我家にいよ、我をそなたの父と思え、——」

なおいい続（つ）がんとして苦しげに息す。

「明後日（あさって）の夜は芝居見に連れゆくべし。外題（げだい）は阿波十郎兵衛（あわのじゅうろべえ）なる由（よし）ききぬ。そなたに見せなば親恋しと思う心かならず起こらん、そのときわれを父と思え、そなたの父はわれなり」

かくて源叔父は昔見し芝居の筋を語りいで、巡礼謡（じゅんれいうた）をかすかなる声にてうたい聞かせつ、あわれと思わずやといいてみずから泣きぬ。紀州には何事も解しかぬ様（さま）なり。

「よしよし、話のみにては解しがたし、目に見なばそなたもかならず泣かん」いいおわりて苦しげなる息、

ほと吐（つ）きたり。語り疲れてしばしまどろみぬ。目さめて枕辺を見しに紀州あらざりき。紀州よ我子よと呼びつつ走りゆくほどに顔のなかばを朱に染めし女乞食（こじき）いずこよりか現われて紀州は我子なりといいしが見るうちに年若き眼に変わりぬ。ゆりならずや幸助をいかにせしぞ、わが眠りし間に幸助いずれにか逃げ亡（う）せたり、来たれ来たれ来たれともに捜せよ、見よ幸助は芥溜（ごみため）のなかより大根の切片（きれ）掘りだすぞと大声あげて泣けば、後（うし）ろより我子よというは母なり。母は舞台見ずやと指（ゆび）さしたまう。舞台には蠟燭（ろうそく）の光眼（まなこ）を射るばかり輝きたり。母が眼のふち赤らめて泣きたまうを訝（いぶか）しく思

いつ、自分（おのれ）は菓子のみ食いてついに母の膝に小さき頭載（の）せそのまま眠入りぬ。母親ゆり起こしたまう心地して夢破れたり。源叔父は頭（つむり）をあげて、

「我子よ今恐ろしき夢みたり」いいつつ枕辺を見たり。

紀州いざりき。

「わが子よ」嗄（しわ）がれし声にて呼びぬ。答なし。窓を吹く風の音怪（あや）しく鳴りぬ。夢なるか現（うつつ）なるか。翁（おきな）は布団（ふとん）翻（はね）のけ、つと起（た）ちあがりて、紀州よ我子よと呼びし時、目眩（めくら）みてそのまま布団の上に倒れつ、千尋（ちひろ）の底に落入りて波わが頭上に砕けしように覚えぬ。

その日源叔父は布団被（かぶ）りしまま起出でず、何も食わ

ず、頭を布団の外にすらいださざりき。朝より吹きそめし風しだいに荒らく磯打つ浪の音すごし。今日は浦人も城下に出でず、城下より嶋へ渡る者もなければ渡舟頼みに来る者もなし。夜に入りて波ますます狂い波止場の崩れしかと怪しまるる音せり。

朝まだき、東の空ようやく白みしころ、人々皆起きいでて合羽を着、灯燈つけ舷燈携えなどして波止場に集まりぬ。波止場は事なかりき。風落ちたれど波なお高く沖は雷の轟くようなる音し磯打つ波砕けて飛沫雨のごとし。人々荒跡を見廻るうち小舟一艘岩の上に打上げられてなかば砕けしまま残れるを見出しぬ。

「誰（たれ）の舟ぞ」問屋（といや）の主人（あるじ）らしき男問う。
「源叔父の舟にまぎれなし」若者の一人答えぬ。人々顔見あわして言葉なし。
「誰（た）れにてもよし源叔父呼びきたらずや」
「われ行かん」若者は舷燈を地に置きて走りゆきぬ。十歩の先すでに見るべし。道に差出でし松が枝（え）より怪しき物さがれり。胆（きも）太き若者はずかずかと寄りて眼定めて見たり。縊（くび）れるは源叔父なりき。

桂港（かつらみなと）にほど近き山ふところに小さき墓地ありて東に向かいぬ。源叔父の妻ゆり独子（ひとりご）幸助の墓みなこの処にあり。「池田源太郎之墓」と書きし墓標またここに

建てられぬ。幸助を中にして三つの墓並び、冬の夜は霙（みぞれ）降ることもあれど、都なる年若き教師は源叔父今もなお一人淋（さみ）しく磯辺に暮し妻子（つまこ）の事思いて泣きつつありとひとえに哀れがりぬ。

　紀州は同じく紀州なり、町のものよりは佐伯（さいき）附属の品とし視（み）らるること前のごとく、墓より脱け出でし人のようにこの古城市の夜半（よわ）にさまようこと前のごとし。ある人彼に向かいて、源叔父は縊れて死にたりと告げしに、彼はただその人の顔をうちまもりしのみ。

底本：「日本文学全集12　国木田独歩　石川啄木集」集英社
１９６７（昭和42）年９月７日初版
１９７２（昭和47）年９月10日９版
底本の親本：「国木田独歩全集」学習研究社
入力：j.utiyama
校正：八巻美恵
１９９８年10月21日公開
２００４年６月６日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。